



和文教科書二之巻

美濃 源 歌子編輯

徒然草 めまほ

寺院の事、さうねどうつけ物も、名をつくること、昔の人へ、さうかもめど、たゞありのまゝに、やまくつけらるる事、さうが、さうく葉ば、お見をあしはさんと、さうらすうじきくゆふ、いとじつう。人の名も、めあれぬ文まと、つうんとまつ、益なき事あら。何とももせざることもさとあ、笑、悦をうむ、淺井の人は、かあ、いあ

図書 和図書 邇



a 1 3 8 0 3 2 1 1 8 6 a

福岡教育大学蔵書

事ありと。

蟹のあつめ、いじらすは、賣すけレバとある。  
にかはるかづくわれば、ねぐらうわる物よ  
そ。蟹ばらうと、御前ミツルて、さくらうわれば、や  
んごとあき葉あれ。鳥スハ、雉シマフサ、ツバメ、  
ね草スカシあと、ほ湯殿ボウドウの上にかづりたるも、  
かづど。其外ハ、山ヤマを華カサ。中宮ノウゴウの清方キラガタのほ湯  
殿ボウドウの上に、うみ桶ウミバケ、肩ヨコの子えコエと、入アリて  
通汲ワタツクの井イを、アヌシタせ給タスひて、やうてほ文モと、  
かづやうの物モノとあづ、アヌシタまほ桶ウミバケと、アヌシタて

すゞしーこと、アヌシタまほ桶ウミバケを、アヌシタて、  
ばらうと、アヌシタまほ桶ウミバケを、アヌシタと、  
やうやう。

人の才能タメノリ、文アキラカして、聖の教セイノキョウを講ハサハサ  
を、第ハチ一イチと、波ハシよヨがカへ事モノ、アヌシタとアヌシタて、  
あくとも、是シテをあつべー。是シテは、便ハシあハシて、  
す。次タマニ醫イシハシをあハシべー。是シテをやハシて、いハシくを  
たハシは、忠孝チホのハシも、醫イシハシをハシべハシ、アヌシタじアヌシタう  
らアヌシタ、次タマニ馬ハシにハシのハシ事モノ、アヌシタ出ハシわハシせハシ、アヌシタれ  
をアヌシタが、アヌシタ。文武モンブのハシ誠ハシよハシけてハシ、アヌシタ

べうじ。是を思ひて、あらへといふが如き。次は食の人の天氣。時はひと  
謂へ思ひふ人である徳と云ひ。次は細うから  
づる事がや。さほどの事が多様、思ひの取  
りとらぬ事。詩歌などして、筆者を知る  
道君臣の事もあつて、筆者を知る事、やうやく  
うみかへしとある。筆者を知る事、やうやく  
わかつてゐてはいふ。金が、せうしたる筆者、筆の  
蓋がほむる事、やうやく。

(圖) 美蓋の「とよとよ」で時をうながすと

也、僻事もひいてひづけ。國の為、君のために、  
やむことえどて、たゞひざれ事無。まある  
きのいとよ、くばくあひびゆづけ。人の為  
に、やじことえどて、いとよし而第一は食也、  
第二はせうね、第三に居所とか。人の大事、み  
三つよハ過也。飢も、寒も、病也に思ひしも  
して、開かむをばひと樂ぶとも。但人多く病あり。  
病にまかれてゆれば、其愁ひ事也がや。醫瘡も  
うかうかうかうか。藥もくはなくて、自らの事がおめえ  
て、おれとおれと、おれとおれと、おれと

まし四つの屋を、せとめりとて、とて、とて、とて、と  
も。四つの事、僕約あつた、誰れのへんかとぞせ  
ん。

○ 雅房大納言ハ、やがて、よき人として、大将す。  
おとげやとおぼへる、院の近習あるべく、  
今、あきやまき事を、なんぞか、とやうれしが  
何事ぞと、よみせたあひけるよ。雅房は、高ちにかは  
んとて、つとめら大の、是をきり侍りつゝと、中が  
きのあがすり、又仕りつとやうれうじ、うとま  
くにく、おぼへて、日本のか氣色もだが

い昇進も、お給ハ、さうけり、さばううの、人鷹をも  
たらすりけるハ、思ひどあれど、犬の、是ハ、跡立キ、  
ことあり。虚言ハ、不便あれども、がつゝ、とて、か  
せ給ひて、じく、せ給ひける、君の御心ハ、いた  
ふとき、事あり。だが、いけるものとくわへ、いた  
めに、かけられて、あそびたの、一かく、ハ、畜生  
残害のたゞじあり。萬の鳥獸、ちひき、畜生で、  
心をうちて、お給をみるに、手をたてし、親をうつ  
かへく、夫婦をとめうひ、ねがみ、いさり、欲おほ  
こがを廢し、金を惜めること、ひととて愚癡ある

故に、いかでかまつたる事甚れ。かくよ、かくおも  
あつて、命をうばへんこと、うそでうつむか  
らざる心。かくして一切の有情を見て、慈悲の心が  
うつしハ人倫ヒンルン也。

顔圓ハ、悲世人勞をほざく事也。かくして、人  
をうつすり、物をうつする事、かくして民の志  
をもうづかうじ。又いとぞ、國事、國事、國事、  
がく、いにげづかうじて、眞なる事あり。おもふ  
ことを、おもふ事なくねがこと、おもふ事なく思へ  
どきとおもふ事、おもふ事にてたゞろくばづ

うへ、あはせを思ひ、おことじ切ある。一。  
れをあやめて、眞なる事、眞なる事、あらむ。  
とゆかれての、うへ、うへ、うへ、うへ、うへ  
おもふ事、眞なる事、誰れも、實者の相を察せん  
。おもふ事、うへ、うへ、うへ、うへ、うへ  
そこあふ事、うが甚。病と、うへ、うへ、うへ  
が、うへ、うへ、外うへ、うへ、病、うへ、うへ、うへ  
みて、汗をあはく。汗をあはく。汗をあはく。  
一旦ぬぐぬぐことあれば、汗をあはく。  
心の、うへ、うへ、うへ、うへ、うへ、うへ

額をかかへ、白銀の入る手帳一冊を貰ひ。

(墨)

物小あそき事は、何のものかと考へて、人間の事と思ふ。よ  
哉方をのらへて、人を殺す事は、何の事か。よ  
ろづみねじら、勝負をする人の勝て興味あ  
んために、がむかひが、氣分が、まことに、うな  
らぬ。されど、それで興味、おもひだ事、又出  
られりや。我までして、人を殺す事は、何の事か。  
ば、さういふ事は、じの興味の、第一。人を殺す事  
が、あつても、何とおもへども、事、徳とは云はず

り。じつは、きゆく、たゞ、わざわざ、人を殺す事か  
うそか、わざわざ背のまわり、たゞ、事と興味あ  
是又れもあらう。されば、何ぞ、興味かおこり  
て、やうやき恨みを、おもふたゞじだらけ。畢竟あ  
くいとてのむ失ふか。人を殺す事と興味あ  
く、學問にて、其智を人よき事といたむ。一  
道をまわると、あら、善はほんとうと、わざわざす  
あら、かくじと、うつて、おもふ事と、おもふ事  
あら。大おも職をも譯し、利をもせし、道をも  
のらかにす。

まづ一きせの貢をもとれど、老いたる者  
ハカモもつて礼をも。ゆうすくもあらわし  
ばざる時ハ速にやじを替とつべ。ゆうと  
らんハ人のあやまちか。ふとせよむとて、ま  
てほげひがれのれがあやまちか。まづてこ  
ふとせよむとて、ふとせ  
らざれバ病をう。

くそーあつちば、故清皇の御前より、

御のまわりをよ、今まゐる侍、供拂の色々を  
文字も、功徳も、だづよたれて、まことにやけべ

本草に、序覽があはせられ侍れか。じとつち  
あやまち侍らドトヤけの時一セ六条故内府、ま  
みり給ひて、有房ついでよもあらひ侍らしと  
て、先主ほとつ文字ハ、いづれの篇う、侍らし  
と、とすれやけに、おら篇うと、やたらけに、  
おのほど、ちでにあらえしとぞ。今ハ、とぼう  
うてらへゆ、一きとくあると、やられうるに  
さよみよおきて、まかでよけよ。

花ハ、さかに、月ハ、くわくわのと、さくわう。  
雨は、はるひて、月をこじだに、かく、春のゆく

うぬぢよは、おほしの情すうで、おひは  
さうまあ、ちかくましゆる。庭なども、みだら  
がほれ、敵の、いそばが、あつて、おどりじやうか  
くも、にほやく、おとづれ、じよし、とやくする事  
ありて、まかで、なむかが、いふ、お花をみてとい  
ふに、だよる、いと、おだのと、月と、よ  
くと、おとづれ、あじ、いと、おとづれ、と、  
たぐわへ、と、ぞ、おとづれ、おとづれ、と、おとづれ。  
みどりの、まつめ、と、おとづれ、萬の、いと、始終  
こぞう、うけ男女の情を、じよくおとづれを

「お物が、あはでやみううと思ひ、あ  
あひ聲を、からか、あひを取とじよりあ、う」とは  
き書店を、たかいや、あひらう宿、と、お  
ふうを、おひらひ、いはく、雪月の、おとづれを  
お里の、おとづれ、おとづれを、見ゆる、おとづれ  
して、おとづれ、おとづれ、と、おとづれ、おとづれ、  
うじて、おとづれ、おとづれの、おとづれ、おとづれの  
まのかげ、おとづれ、おとづれの、おとづれ、又  
なく、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、  
おとづれの、うじて、おとづれ、おとづれ、おとづれ

とあらゐるやうと、都へて、月夜をば、のぞみて、さうかのうる春の家  
を立ちて、月のよしむかのうらが、うらわ、  
もふる、と、たのむう。うつむく。  
ハ、ひきとよとす、うらわに、ゆえに、  
あ、がくせうす。かくみかれて、くと、よ  
ろづ、かて、興ざれ花の、よもや、ねじぶわ、立よ  
り、あ、うめかせび、よもやて、酒のみ、連寄、は  
て、ハ、ねまきなづ、まじまく、まくさう、ぬ、泉み、  
あ、まめい、うて、雪み、おとたちて、ゆづま

ど、よううづの物、と、あ、う、うつ、ことの、一、やう  
の、くわが、みー、ち、い、と、みー、の、み、か、み、こ、と  
い、と、だそー、まほど、ハ、棟敷不用、あわと、あくま  
うやうて、かけの、物、くひ、圍碁、双六、あうび  
て、棟敷、うみ、人、を、お、せられ、ハ、う、あ、う、よ、  
よ、よ、よ、お、く、き、せつ、が、や、う、あ、う、い  
け、り、の、ぼ、り、て、だ、ち、ぬ、じ、れ、ま、で、と、庵、ほ、り、て、  
お、あ、ひ、つ、一、事、か、み、か、く、一、と、ま、か、く、て、と  
あ、か、か、か、と、物、ご、と、い、う、と、ま、か、く、す、が、あ、れ  
バ、又、ゆ、て、こ、ま、と、い、う、と、が、か、ね、と、物、と、の

さんと出でた。都の人民、一ヶある  
が、おがうて、こととみゆき。まことに、  
づうづうたちか、くせに、うなづかれて、  
あーへむかうじかう。わざなく、さんとく  
くわく一ふたかへ、葵が下りて、あわせ  
いたに、明はるぬほど、ひよの車ども  
の、ゆうきを、それからしのなど、だらうとし  
ば、牛飼、下部など、かくも、うわが、たへて、  
かくへて、かくへて、にゆかが、うわが、うへ  
あいに、くわ一ほとふ、たへて、かくへて、車ども、

ああくさす、つるへじかく、うへん。  
ほどあく、よしとあきて、車ども、らうかげ  
ち、ちくねれ、ばんだん、がくす、かくはうい、あた  
まへす、だじ一けす、かくゆく、うのためち、  
思ひ出れて、あはれ、大路をひくと、かみ  
たつて、あれ。みの残敷のあと、くらゆちが  
ふ人の、みまくら、あはれ、あはれ、まくぬ。まの  
人數ち、やのこ、わはう、ねぬ。さんあう、  
せあんのち、我が、おぬくわよ、うわたりとも、  
はざまくわうつけがじ。かくへて、かくへて、

どうに、思ひあつや。まことに、とてとつよむのを、  
双六の石みて、つづきて、たまへたら、船、と  
られんこと、いづれのいーとち生へねども、かぞ  
へあて、いとつをとめぬれば、うのほつ、のが  
れぬとみれど、又、うるおれば、かれこれ、まき  
ゆくほどよ、されど、のがれやうじにす。兵の、  
いくよいづくも、死はらへんことをせうて、家  
をもよし、身をもよし。草をもよし、草の庵  
よハ、静うに、水石をもてあるじて、いにしへと  
せへと思へり。ひとほのう。山、山のう。

の、水をひて、ほをいたとあすけたりして、  
たること、たへる一とつみだ。が、ひだりまわる、  
あゆ、が、やうてつかひて、都のやうに、あはせ  
く、が、まはは、あるじ、うじ。一日に、一人二人  
のみあんや。鳥部野、船宿、の野、またく  
ううだ、おはるはあれど、たゞぬはなか。  
それば、いつまく、じたゞかて、うむだく  
ほどあーか、れすを、うむだく。うむだく。  
だかいかくあら、死期あら。うむだくのうしゆく  
けふ、ありが、え不思議す。うむだく、身をの

「おーと、おゆうのやうの一言いはずかず。  
あるあるえひものわざわざ一げあくらう。がくくよ  
あじて、お子ハ、おせむやとどりにじともも、も  
ち待つもとつたくー、がくと、ハ、物のあはれ、  
生うたまく。情あはれゆき、かのーたまく  
んとい、とおをろー。おゆうよーも、まくづのはは  
れ、思ひまくづかーと、もあらぬ、  
き、よかす。恩愛の道あはれ、が、つまつらに、  
意があああや。お養の道あはれのた、すきて  
こそ、親の志、おめじゆくまく。おととく

たく、無事のかわらけられたる。其死  
よのぞめる事、この陣よりするにあれ。  
死して財あることを、智者のせばらへんが  
死ぬのだ。がぬかの、たゞはくおもてのうつたまく、  
うかがひ、ひととくとほつまー。くわたく  
おほく、きて口を。我こそえみなど、ふわ  
のどもありて、ふるあうきひく、ひまかー。のち  
ハ、だれもと、さざかのあらび、うらう  
ぞ、ゆづる、くせ。朝々あくべ、かくはく、しゆめこ  
そあくめ。おほく、何をもたでぞ、あくまほー哉。

死死も死死と  
死死す。死死す  
死死ぬのう  
らけうそ。余行  
ま格もうら  
きたり。死死  
とふ時ときと時とき  
と殺す意おもす  
をもとある

のよろづ事務局は、おまかせして、まことに  
かるじゆゆうが、ついにこゝへひきこもるやう  
みて、無下にだらしないことを、ひうことかかわらん  
の、ひよかれて思へば、おもてに、おかしくは  
やめたが、妻はおとめす、恥をかかせし。おまかせ  
か、おこしぞれへとあら。されば、盗人をいかみ、ひ  
うことかれて、おせこすか、おのんじうをど  
きむつぬやうに、おもかげられたり  
り。いたおの産ちゆき、うその口もへんがたの  
間で、おまかせす。おまかせすと、て、凍餒のう

みあへば、おのぞかぬが、じいとおもへ  
法をもつて、おもてに、おほしをつねふ事、不便の  
事もあり。さて、いよいよ、人をめぐらしやうか  
らお上のをじかづひやせぬとやが、或をめぐら農  
をもめば、下に利あると、うへがひあひ  
かへど、衣食よりおまかせす、僻事せし人を  
うごまことの盗人と、ひつゞげや。

人の終焉のあかざまの、おまかせ一事をあげ、  
のがれをかへじ、たゞおまかせし、おれが  
とつぱに、おまかせす。おまかせすと、あ

い。すゞ、堅固かくほあるすか、よその中にまづりて、さうゆるはるよひはぢぢ、つれなくをきて、やもじへ天性、其骨あくしども、みちにまづまど、みがりにせどりて、年をおくれば、堪能のやなゆだらうか、つひよしよの位よつゝり、徳行は、人よゆきれて、あらじよき名を得る事也。天下の物よりよとづども、始めハ不堪の聞えもあり、天下の被縛もあり。されども、其人ぶちれおきてたゞ、一く、是とれもくーて放棄せざれば、其のはうせうて、方人の師とまること、諸景

やーく、とまふ相をかうり「は、いひ」とすむ、するまじいか、にのれうづのじかに、ほめあるこそ、まぐの日ごろは本意すら、あらじやとねまゆれ、大事ハ、権化の人も、さうじううべ、博学の士も、げうべからざが。われしなづとくわくくば、人の見聞よハ、まくじうじ。

〔墨〕  
能をつうんとまくくよくせんし難ハ、がく、いよ、人にまつれド。うらへよくまうして、と生たまへそ、いとくよくうめと、つねよ、よめれど、かくよく、難せんじうことな

此人と犬納言  
爲靈入道をよ。

かううううう。

け人東寺の門に、雨やどりせられたりまくに、が  
たはもれどめのあ「わがわがわがわがわがわが」と、ね  
ちゆうが、うわがわがわがわがわがわがわがわがわがわが  
うううとみとみとみとみとみとみとみとみとみとみとみと  
り。だ、愛おしにたれりと思ひて、さみつたまじせ  
うほどよやうよやうよやうよやうよやうよやうよ  
いばえられがたじせんがふ、おづこーかぬも  
のふ、ふ、ふと思ひて、かづくてのふ、この間、う  
きまきのうて、ことやうに、曲折あるとわざあ

て、目をうるさげ、めづらがの、うはむと  
愛おしかりと、興味へおもむき、鉢も  
あしらふもども、おまほりとてらるる。  
もあらぬじやことやす。

そじよと、うむしん、先づ機縫をひらべ。つ  
であ一か事、への耳もとうひ、身もとださ  
て、其事あらじ。やうのまかす一と、ころうべ  
き。但一病をうけ、かうが、死ぬ事の、機縫を  
はがくべつりとあらべ、やむことやむ。生往異  
滅のうばりがゆく、かうの大事、だきまくの。

おおかづかへる。うへて、まごへん  
だ。だらにがくらひゆくのやう。されば、眞俗  
よつけて、せはうとげしと思ふんこと、ハ機縫  
をいじじうじ。とかくのうへ、あへ、をふ  
とじまざかがの。春られてのむ、暮じゆわ、君は  
て、秋のくふみがあへど。春は、やうて暮のきを  
かよほ、ゐなか、まごへんかうひ、君はまかは  
ちとゆくまか、十月、小春の天氣、草もあそくが  
り、ねむほんぬまゆがたつむ、先づねうて、め  
ぐじよへあへば。下りつきやうへんに、たへば

一で、だつて、ゐり。せうる氣、下りきつて、たるぬよ、  
まかよへりて、甚は第一。生老病死の、うつさき  
たる事、又是よ過る。四季が、まかよへまかは  
いであり。死期、ついでをまじ。死は、あむか一  
すきだらう。さて、うつろじせられり。人間が死  
あつことをみて、まつこと見て、も急がへるよ  
に、いはゞむべて、まう。汗のひが、はくうあれど  
も、残すり、潮のみはくうど。

身をそれば、物か、札、樂器をそれば、音をだして  
と思ふ。盃をそれば、酒をだすじ、いをとし、

うたんこととれたまふ。ひれ、家を事にされてきた  
る。からみちが善のたまふしと、あらうじ。あ  
らうじは聖教の一物をもつて、何となく、前後  
の文を見ゆ。卒およて、多手せ非を、あくとも  
ことかあり。かりにいは、此文をいわげどもす  
うばげ事を持てんや。れ、則ちすくふの益を  
り。ひそかおこづけむか。佛あるあつて、せうを  
とか、經をとくば、おこだくうちよも、善業、おのづ  
か併せられ、散乱のひやく。れ、纏麻のむせば、  
おほえじて、草堂ある。一、事理をとくす。二つ

きも外相りそせう。爾ば、内證必熟也。ひ  
て、不信とづくべかじ。あふざと、れをなすと  
じべ。

世の人、あひあふ時、さびしくし、黙止もつゝあ  
る。必ずあり。まこととれり、じだよへ、善業の  
詒あり。世間の浮説人の是れ、自他のために、失た  
ほく得もへず。しをかづく時、たゞひの心、  
無益の事ありとづくことをぞば。

一道にたづく人、あぬ道のけろにのみ  
みて、あらし。かう道あるきを、かくうとにみ

待トカのとてひ、ひも思ふと、このこと  
とあれど、よじまつてはゆるを。すなま  
の、うやまくおぼえが、あがうやまく。あざ  
う、あらはさかうんといいてあがまん。我智をと  
りぬて、くわきよハ、つのあるゆれ、つのを  
かづけ、牙あるゆれ、かばとかみしむらを  
いあり。くとてハ、善よほづらじめとあらは  
ざくを、徳よ。他よまたかくのあらハ、たまう  
失ふ。昌のたまきてじ、お義のせうたらふ  
ても、先祖のほまれてじ、くわまんりと思へ

ふ人ハ、たとい、こはよいで、こそ、いはゆる。  
内に、そこばくのとつあり。つ、一みて、これと  
きしむべー。きよもそえべく、いひけられ、き  
さはいをちきねくハ、たゞけ慢ひゆ。一道も、  
まことじ長じゆく人ハ、がづうあきくがよ、其  
非をもつゆゆゑ、つむぎ、つむぎ、そたもて、  
つひよ、物にはうることある。

年老いたる人也、一事にもぐれちる、ものありて、  
この人れがちよハ、誰もうとまくちど、いきまく  
ハ、老れかうどうて、いやくも、いきまく、いきまく

やうやう暮るくて、人のがりゆくはなかぬ  
さあり。用ありて、ひづかとむこと見てうが、  
くからうじー。じーくあへる、じむつじー。  
じうじれバ、こよばねほく、みちくじれじ  
静うあらじ萬のこと、だけて時をうたひだが  
ひのため、蓋す。いとけげよ、いとけよ  
口づきあれこと、あんまめハ、中へ、  
いひてん。たかド、にゆ、はまく、思はん  
の、つれぐま、さばげ、けふ、四つ、おに  
ど、いそと、みかまわは、あくまく、じー院籍

と、あらむしも、いたる處の、ちかに、一葉  
のみ事見て、これよけりと、はるかくみゆ、今、わ  
かれよけりと、うじて、ゆかん。たかじ、せりた  
りとも、まろに、ひじゆく、さばうのやよ  
ハ、あ、ぬやと、きふえ、お、じう、あやせわら  
きゆじー。まだかくも、かきまく、まよぞいひ  
くらは、だれか、じ、みちのあ、じーと、わ、だほえぬ  
べー。まきて、かくの事、まく、うに、おとすく  
も、ときねじくも、あ、ぬくの、いじまく、を、そ  
と、かくと、思ひかう、間あふ、と、まじー。

ひちく石を、かわすてほ。くい、あつてば、うて  
もとと、くみて、くみひーりきと、くには  
トヤバ、たてつるいー、あくま。事、外よじさ  
て、おじじうじ。只、こせとと、たーくたー。  
清獻さびことよ。好事をひくと、善能をよ  
とよれといひ。世をかかへて、みやを  
侍し。うむと、ーある。かくくほせに  
て、みだらは遠國、かくくじそとくす。す  
きて、はうこととぞじゆ。あが、温ふす  
て、病を、神靈にうつす。かく、うのくす

う、青き眼、誰も、くわくわ。かわ  
に、くのまかて、かどりに抱徳して、ゆく、  
す。又文と、べーく聞えよせば、かと、か  
いあいせひつと、うれ。

(墨)

見をねよ人の、我まくさくと、いたきて、かと  
みゆくと、人の油の、うど、じよの下と、かとく  
げふかに、前まくと、ば、あはれぬ。よくにほ  
ふく、よそまで、こかくまくと、ば、えびて、  
ちゆき、よほやうあれど、おほくおほく  
あか。墓盤のまくよ、一をたて、ばくへにむ。

驚の書じてへる。且一回の身のまゝ人の愁と  
やか、憲をほどして、酒をたべてせば、其化とは  
くちづれしに思ふ。うとうとすが、萬のゆきて、三  
苗を祀せり、山をかへり、徳をもぐゑを  
さへうだされ。

わうかいかに、血氣うちにおまかし、ゆのにうび  
きて、情欲おけ。心をゆすめて、ひざけやせれ  
こと、殊をほらすにほへり。美麗をもみ  
て、寶をつひやー、是をかたへ、音のたれとこやつ  
し。ことあらじ、心がけにて、物とめうじ、心よ船

うやみのむ所をじとくじ色にすけ  
り、情よみて、心をつむかへーと、百年の力もあ  
やあり、命をうーといため、死はくじて、身  
のまゝへひきかへし事をび思はふ。とくに、か  
いよ、うつろひかれて、身がたりてかうる。身  
をあやかう、心をうかれて、心をうかれて、老  
ぬくへ、精神がうちへあはへねがうりて、老  
感とうごくふかー。身のうへ、神がうへ、身  
蓋のうへ、身がうへ。身をうかれて、愁あくへのわ  
づくじかへて、うかれて、老て、智のわづき

とかよひかくふる事、ひきとてがゆれば、考へ  
にまかねばうじと。

小野小町が事、かたきてよし。うあいじ。だとうへ  
ちるときまへ玉造といふ文に、みえどす。じ文、清行  
うかげあと、つて説あれど、ち節大師のほれの目  
録よりなり。大师ハ、慈和のはめよがれたま  
す。小町はさかうあくこと、いのちのうちこととす。  
様がほつまゆ。

小鷹にあき、犬たうに、つうじぬれ、小鷹にわ  
らくなもつよ、犬よつき、ふをよつてまゆ。

まことじゆうあくへ事、ひまう中じ道をゆの  
一歩す。氣味ふうかへゆ。見事の大事す。一  
たじ道を間て、こしよ、こわい、しんぐてのわ  
ざか、きしれざへゆ。がふ事をうりとみゆくわ  
うある人と、ひよとせ、かーこき犬の、こーくふに  
とくしんや。

世よハ、心をゆことの、ほむれゆ。ことあること  
にハ、まづ酒をくめと、せのあせやくと、眞と  
きふこと、いふゆふゆあつよか、いふゆふのじんのか  
ほ、いとたへうげよ、眉をひそめ、くわをほづ

て、おとしよにげとまくらをうけて、じかと  
どめで、まろにのませて、うつむかへて、  
たぢまうに、柱人をあわてて、かまへ、息がま  
る人を、めのまへて、大病の病者とあわてて、あはむ  
まよび、かくす。ふく。ふく。かくす。  
一からゆぐ。あゆみを、頭ひく、脚くはせ  
に、ゆびよ。ゆびよ。ゆびよ。ゆびよ。ゆびよ。  
こと、あゆみ。おほやせ、くわせ、おほやせ、  
て、きづひとゆく。ゆく。がくゆく。ゆく。  
こと、ゑおひなく。ゑ義おせをゆく。かく。

きめよ、あひだよし。ねたへりをとおもひ  
らんや人の國に、かくまかへひあふなかと、これ  
らにあきへ事を、アシカタマヒ、あやへ、  
よーかにあほをひ。この上を、ぶかるだよ  
心う。思ひへたらかおどりよへと、みーへ、  
だまよふまく、きみのまへ、ことばおほく、意  
ほーゆ、うみじあはづー、ほきだまへかへげて、  
おういあき、けーきゆこひの、とせだほえじ。女  
ひじだいが、ばれらかよ。おきゆか、おばゆう  
じ、かほううみげて、キヌの、萬ゆふ、かじと

りつきよかぬ人間をもて、うちじよ  
あてみづうじよじよとめおー。おれがよ  
生一て、各うたひまつ年老いの法師、めー生  
れで、くろくせんのあきらめを、かくぬきて、同もあて  
られど、すじかへと、奥じよく人間を、うとま  
くよ。ある「かく」はうかじよじよとめ  
たほういたくじよとめ、ある「破」あわせ、下だ  
まのくは、かあひじよかじよて、あやまへくわそ  
ろ。船がまく、じよとめ事の、あすて、ばて、ゆ  
うとぬ船とせ、おーとみて、様ようだら、馬車あ

おちて、あやまくーつ。物よものらぬまくー、大邊  
を、よろぼじゆかて、つ、ひぢ行の下などに、じき  
て、えむしよぬ事とおもくー、年老い、けさか  
げくの法師の、小童とがをだして、同えぬこ  
と、も、いつ、よろぬかだる」と、うよゆー。か  
うふこよとーても、じせむ、の世も、道ある、「か  
きどあ、ば、い、よ、ハセシ。」のせよ、あやまう  
おほく、財をうーあひ、病をまく、白薬の薬と、  
こくど、薬の病、酒す、をあひし。うとくわ  
あふと、いど、おじよと、ぞ、萬がう、うとくわ

思ひ出でなくゆる。ほのせば人の智恵をうかがい、善根をやくこと、やのこよめて、惡をあらわすづの戒をழりて、地獄よだつべ。酒をとひて、人よのませんふく五百すゞ間をかねかのにせうとこそ、佛ハ説きたまふもれかくうせかと、およかのされど、おのづからせてかせきわむあつべ。月の夜、雪のあつた日のむと見ても、心のよやかよ、物語へて、盡かへず、さうづの奥を、そよごわざめり。ついづくる日、だめじの外よ、おのへきて、おこなひたまも、ひおづきじ。

あれへいかぬあわうの、みかのうちかまく  
だよ、みかかどんかみかみ、たまひーと、  
いだされひーと。おせうふくして、だよて、  
物ひかきみて、へだてかみかみ、みかひいて、  
おほくわいたう、いとだう。たびのかりや、野山  
おどくまとうが、けうなまくひいて、まぼの上  
まく、おみこらかだう。ひくひくの、まく  
らして、おうのみだくせうと。おせうの、さ  
り立きて、ぐいぐい、うへかたなど、おだまは  
せうもうれ。ほづくはくの、上戸よ、

じりとある。又うれしくて、上テ  
はおもへて、おゆきのままである。おひさし  
びれて、おもいへたるおとおのひきあひたるに、  
まだいて、ほれだくがほのう、ほんをせらり、  
そりか一物をあくび、うなづかむ、じかくちの  
てよづ、かいとちがひ、うろも毛あひた  
る、ほそはぎのほど、おとへゆゑ。

（墨）  
鎌倉中書主て、唐鞠ありしるに、あめすては  
いま、庭のかき、ぞりられ、いざせんと、そづ  
た、あらうに、佐、お隠はへぬのこがわくづ

を、車につみて、おほへ翠りあふれ、一度よき  
かれて、泥土のよづらひ、おうり。おつたせり  
ん用意あらがうと、人感じあくちよ。じ事を  
あらゆの、譯りあがりに、吉田中納言せ、か  
きとみ、用意や、おあくらと、おたかひた  
り一が、ほづうかうせ。うどと思ひうる、せ  
こぎりかくばり、かくへ、とくのことく。庭  
の儀を、奉行する人、おまかせた。おまかせた  
故実あらう。

或而えもがひども、内侍の御神樂を見て、人

よがふとて、寶鏡をば其へどもかうだまくあ  
ど、うかとて、うらみの女房のみに、御殿の  
行幸より書御座の御鏡をとよあれど、そのじ  
やうにひじりかへり。ひよへかき。そのへかき  
典侍ありけりとす。

墨玉

相模守時頼の母バ、柳下禪院とぞやう。母とい  
しやう事ありとくふ、もじけたるあつさ  
うどのやがれば、を、禪院もじうばかりて、  
きりおづつ、ほんれきをば、せつとめ、城の義  
景、ちゆのけじめりて、ひじりのうが、絵はりて、

あふが一男には、せひとし。とやうの事に、心得  
つゝ若さと、やがれくれば、其男、尼、細工によ  
もまわら侍らどとて、だ一間づゝ、ほづれをきと、  
義景、そもをほりかへりとし、ほづれがよだやと  
くらべ。まづりにひも、みづかへりやと、がくす  
てやられくれば、尼も、ほづれをきと、ほりかへ  
とれむとども、けづれを、ほづれと、かへて、ある  
げれあり。物ハ被れたらあづれを、修理にて用  
ふ事ぞと、うきと人よみあはせて、ゆつとんた  
めあすと、やがれくることありが、あつよ。世

を治め道徳約をもとし。女徒あれども聖人の心よからず。天下をたもつほどの人を、みよてもそれよりまことじたびとよか、あらわしげくとも。

城陸奥守泰盛は、さうある馬乗あわせり。ひき出でせり。馬をさへして、おれをゆるべと、この馬とみて、是ハシとめの馬ありとて、鞍をねりかへさせり。すれど、馬とのべて、おれが子はけあてぬれば、是ハばぶくとて、あやまつあつじよどて、のらざりき。道を歩くといふ人、うばは

(三)

りおどれあんや。

うづの道の人たどひ不堪あらといひども、堪能の、非家れ人はあらび時、ぬまむることい、たゆみあるべつてすと、からべへせひとじとくは自由あるとひ、ひとくのゆきのまよ。是無所のまにあらび、おほての振舞ひ、づつも、だらうにそそてしゆるハ得の幸あり、たゞみて、ほしもおもなき、失の幸也。

或者、おと萬師はかくして、夢回して、因果の理をもあら、説法おどて、せよかよせよかよせよ

(四)

いひれども、かくへよせば、説經師のまことだ  
めよ、先づ馬にまよひて、輿車をぬかの尊  
よ、附は清せられんす、馬あざむかず、だ、せたし  
よ、かく、さりて、ぬかむかひ、かくべーと思  
ひけり。次よ、佛事の後、酒あざむかひ、あ  
んよ、法師の、臺下に詰め、檀那、とおがくに  
まべーと、早奇きゆことと、なまくらす。ふ  
くたのまよ、やつて、まくらすへうれば、よくよ  
くとて、かねばくと、かくまくらすよく、説經を  
らふべき、いままくと、年かわにまよ。法師のみ

よもあらむ。世間の人、まごてることあらうが、  
きね、諸事につけて、力をたて、大あらみちをじ  
成し、能をもつぞ、三回をもせしと、ひまじと一へ  
あくまむこと、も、ひるめかけあづく、世をのど  
ふに思ひて、うちおこなうつ、まづまーあくま  
たう、月のあらことにのみまがして、月日をたく  
しバ、ことごとく、おと事あくへて、力ハ、若ぬ。ついよ、  
物のよみにせたうじ。思ひへやうに、力をもたら  
ぞ。くゆれども、とかかへゆく、駿あらねば、ば  
かて、おとくじの輪のじ、だとうへゆく。

ルバ、虫のつむぎもあつた。かゝる事の中には、少しのまづと、まづと黙じて、暮の夜になると、萬物の氣が、思ひまして、一事をほげゆべ。一日の中、一時のうちから、あるのこゝのあたみに、一時も暮のまづと、こゝかへりて、思ひて、暮が暮れて、大暮をいきぐらへぬまが、何處をも見て、一暮を、むかへ、一暮が暮れ、かへりだといふ、暮を、つぐすをかく、つぐすをかくだらう、小つぐすだはつぐだと。されよとて、三の石をとて、だはつぐだと。

をもて、十の石はつぐ、とゆ、伊豆、十石まで、十一の石へ事は、かへ。ひとびおやうとも、さらへかへへこそ、つゞいたも、十石ぞ、おやうば、きへおぼれて、おほへまわるぬ石は、いに、い。見をかねて、かへておこしを、おこして、ゆかへをえお、見せむらへ、お手づき道。京もあへん、へんが、て、本ひよ用ありて、まづにひけたりて、西へて、其處をゆる。うれしことも、西へて、西へて、ゆへたきあ。へおどれのれ、うへ事を、先へて

し。日をかへぬことあれど、西山の事は、うへて  
又こそ、だれへたゝめと、思ふ故に、一時の懈怠、  
なほち一生の懈怠とする。是をだそつべ。一事  
を、必ずある」とおもふ。他の事は、ほゞ、とも  
いふ。もぐらうじ。人の嘲をも取じ。難事は  
かへじて、ハ、一の大事。おじうじ。人あま  
あまつゆれて、あまゆる。せむるがのせむるは  
のあまきあど、いふ事あ。あまひぐよ聖。こと  
を、「たゞせりやんかとあづかひくと、登連清師、  
わさに侍りゆくが、さて、西のすうきつよ、みの

かとやあふ、かーたまく、かのせゆることあ  
ひよ、ゆきゆくばれひどきのが、尋ねまつしと、  
いひうきと、あまくに、まよとまう。雨やみてこ  
そと、人のひじられば、嘆下れ事をも、仰ぎゆく  
物うし。人の傘は、雨のそれまきも、まくゆのうは。  
我をまよひ、ト、ゆもうせあが、たゞゆき、てしや  
とて、ほり出でゆき、まゆく侍りにあわと、  
やつたくふく、ゆき、ゆーくありが、まくおぼゆ  
れ。敏きとが、助功ありとぞ。論語といふ文も、  
詩もなる。」のを一を、つづりへ思ひ立む

うに一大事因縁をうけた。おまかせ。

④ 今日、大事を終ると、思ひ出でる。先  
づおあてをさへして、わざとおもひ出す。  
たぬきぬくはだだ。だのみだらかのじと、た  
ういて思ひ出ぬ道ばかりが、かうじゆる。さ  
けうかつて書はしてあるが、それがいれと  
ハハとひびく。おじゆくゆくおまかせて思  
いつる。おまかせておまかせて、おまかせ  
生の間も、おまかせがおのてのあまかせ、おま  
かせくふとおまかせくふ。おまかせ

あれ、よほどの、おまかせ。おまかせ  
えぬるのみ、おまかせておまかせ。

夜よけて、おのはえおーと、おじと口を。  
茶ぢやの、さくがさく、色よーたらふのこいを、め  
でたうし。おは、おさぎ、おまかせたる漢字を  
ち、ありまし。おは、おまかせたる漢字を、  
うそくいふ。おは、おまかせたる漢字を、  
おまかせ。おは、おまかせたる漢字を、  
用意あらはる。匂いた、おのはえ、おまかせ、ひ  
とかはさでたれ。おは、おまかせたる漢字を、

ちよどり、おのれの心の爲めに、かくも一時を  
いとく。まことに、かくしておのれの時を  
かうむ物あり、ことじゆくとけぬ、おもか  
ゆきげたるくじきつくるはまほ。おもか  
男のはうしてゆふる、女も、おもかほど、かく  
りつゝ、鏡とて、かほおどつうひて、おもかを  
につけき。

(墨)  
うき人の、其智をせりと思は  
し、うきあるが、たまへ人の、暮づつ  
事ばあよどくとて、かほおどつうひの、

け筆におのれの心をみて、おのれうう智に、おうば  
おとせりて、すみづれ道のたうみ、我道を、人の  
ううとみて、おれとぞれううと思はし  
と、大なるあやめりあるべ。文字の法師、暗證の  
禪師、たゞいよはうきて、おれよおうまと思へ  
る、ともにあうべ。おれうう境界に、あうべ  
を、あうべ。是非ちうべ。  
達人の、人をみる、あらわす、あらわ  
べうべ。たゞいよ、或人の、うじよ、うじよ、かま  
くらうて、人をなう事あらふ、かまくら、誠

と思ひて、うれしい。まことに、  
にふるい信をみて、涙がこぼれて、虚情に  
心得がある。何とぞお詫び申しあげ  
けね。あら、又いつたがつて、おもふて、  
たのむゆきをうなづく。おまかせたまへば、  
うへあら、又おひそみしておなかへんわ  
す事なし。おまかせしておなかへんわ  
又おひそみ。おひそみ、おひそみ、おひそ  
み、おひそみ。おひそみ、おひそみ、おひそ  
み、おひそみ。おひそみ、おひそみ、おひそ

み。おひそみ。おひそみ。おひそみ。  
あら、又おひそみ。おひそみ。おひそ  
み。おひそみ。おひそみ。おひそみ。  
おひそみ。おひそみ。おひそみ。おひそ  
み。おひそみ。おひそみ。おひそみ。  
おひそみ。おひそみ。おひそみ。おひそ  
み。おひそみ。おひそみ。おひそみ。  
おひそみ。おひそみ。おひそみ。おひそ  
み。おひそみ。おひそみ。おひそみ。

。すてあるまことにのまどへり  
をみことだが、うのうへせ、物をみんぢ  
う。但かやうか、行はまよ、佛法をもあ  
らへづべきよいあひだ。

(重)

徳大寺若大臣殿、檢非違使の別當の時、中門下、  
使廳の評定おこなはれけるほどに官人章屢が  
牛はるれて、廳からまへ入て、大理のせばまゆ  
うのうへよのぼりて、それうちがみて、ふたり  
あたれき、惟異あがとて、牛を、鷹揚師のむとへ  
つづけさせし、各車のと、文の相國、す、宿

ひて牛ハ云別當。是あれば、いづくらうかほ  
ざ。極弱の官人たまへ、出仕の、微牛をと  
ふきやうなとて、牛を、まにかへーと、ふ  
たうけた、みを、かへらへまう。あへて、凶  
事ああうとみ。あやうをみて、あやーま  
さうとき、あやーみ、うつてやづとひへり。  
龜山殿たてられしとて、地をじうれりよ、大き  
きのうもよは、數をあが、こわあつまつたら嫁  
あらわ。既前代神さうといひて、こよのうを  
やされば、ひ、おどれと、勅向ありまへ、よ。

(重)

くすり。この地を出でて、物あつたる所へ。  
もとらしが一とみなしやうにゆきよ。ゆめた  
とく一人王がよなまし。皇居をたてられん。  
何のたりかうねども。御神、御み。とも、  
べうじ。只みお振たつて、やられなかれ  
バ、塚をくづて、蛇をば、大井川よあうてけり。  
さうにたててあうけり。

(観)  
人の田を、論。もみのうたへはせきて、ねだに、  
そぞ田をかうて、されど、人をくづけよ。よ、  
生づみちむかの、田をぬぐかりせよゆゑと、豐

(論) トたまよ西すあ。ま。トよ、かへびとい  
うれバ、かくのども、いがくとくわ、かくじきこと  
きりあうれバ、併事せんとく、まくる若あし、い  
づくとく、かくぞうしとぞうひる。とくか  
とおうかうか。

萬の事ハ、たのむ。うじ。がくうきく人ハ、ふう  
くかのとたのじゆくじく、みりふくわ。あ  
ひれほじあうと、たのじく。うじ。はまか  
先にうぶ。賊あはれて、たのじく。うじ。時ま  
に、失ひやす。やあとて、たのじく。うじ。孔子

也。時又あはれ。徳ありとて、やのじくら。也。頼田  
も、不幸あがき。君の寵をも、頼じづかう。謀をう  
ぐる事、もみやうす。奴をもうづかうと、やのじ  
づかう。も、もみやう。事あり。人の志をも、頼じ  
づかう。も、もみやう。約をも、たのむ。也。信ある  
事、もみやう。也。も、もみやう。事、もみやう。也。  
も、もみやう。也。もみやう。也。也。也。也。也。也。  
も、もみやう。也。もみやう。也。也。也。也。也。也。  
も、もみやう。也。もみやう。也。也。也。也。也。也。  
も、もみやう。也。もみやう。也。也。也。也。也。也。  
も、もみやう。也。もみやう。也。也。也。也。也。也。

す。ゆ。く。一。や。ほ。う。な。く。す。一。毛。も。持。せ  
む。へ。天地。の。靈。す。天地。の。か。ぎ。く。あ。る。人の  
性。も。ん。そ。こ。と。あ。る。寛。大。す。一。毛。も。持。せ  
む。も。喜。怒。是。に。ま。ま。ぐ。て。物。の。た。め。に。ま.  
ら。は。す。

想失意といふ樂ハ、女、をとふと云ふ故の、名々  
ハ、あ、い。ど。も、と、も、相、府、達、文、字、の、か、く、く、す。昔  
の、王、僕、大、臣、と、て、家、に、ば、ら、ま、と、う、す、て、愛、キ  
と、き、ば、樂、す。且、す。大、臣、を、達、府、と、い、ふ。通、名、も、  
廻、鶴、す。廻、鶴、國、と、て、え、び、の、こ、ほ、く、國、す。其

夷漢ニ伏してのちに、事あらむ。國の、  
と、奏せりあり。

(集)

後鳥羽院の時、信濃前司行長、松吉のほまれ者  
けつう、樂府の序論義の番にめざれて、七德の義  
を、よへつましたりされば、五德冠者と、是名を  
つかよひゆきを、ひうちとて、學問をもて、  
遁世一たりうきを、慈鎮和尚、一聲あるゆゑをば、  
下部すでも、めーおきて、不便はせんをたすひけ  
きばげ信濃入道を、扶持一だすいきわ。ばひも入  
道、平家物語をつくりて、生佛といひけり、盲目よ

もーして、かづくせよ。さて、この事を、こゝに  
ゆへて、かげる。九郎判官の事、いくつてもう  
て、かきのせつう。蒲冠者の事、いくつてもう  
うや、おほくの事、どもを、うへて、せり。武士  
の事、弓馬の事、生佛、本多の事、武士に  
とじかへて、かへせけり。彼生佛が、生れつまゆ  
きを、今の大慈法師、おもひじたるなり。  
とじて、人へ、眞智真能あることをめたるなり。ある人  
のみ、みだまるど、あいかわらう、父のあふく、人  
とゆのひよとて、史書の文を、ひきだり。

くハ、間えーうども、尊者のかへりと  
もとよほへん。

又あらへのたゞて、毘盧法師の物語をかぞ  
えじにはをかへうせつて、にがうのじよつだち  
たりーう、しやかて「ナシヒツナ、ある男の  
中に、あかねと、ゆゑう、うなづいたる病、  
ありやまどりの御子れ、つみをあすへり。ひ  
はあどひくにこそ、かうの法師のじは、其  
ちなむにとゆか。通じて得るが、うやど、か  
たまつてかかが、じたへの柄を、じたのまゝ、

ゆうゆう。

萬のとく、あくべと風か、何事すか、わいとあく  
て、べとくべ、うふへ、間えりかくふ  
かく。男女老少、みだらへに、よしとしらべ、  
とよきく、かくかくかくへのうへ、わいと  
しげ、くへ、思ひつゝかくかく。萬のとく、か  
きかくかくじよかく、あえぬとくかくへ  
をあらううとくかくへ。

人間の物語には、必ず其の物語の主たる人物が、その物語の筋を成す。又、物語の筋を成す人物は、必ず其人の心の動かし方を表す。又、心の動かし方を表す人物は、必ず其人の外見を表す。又、外見を表す人物は、必ず其人の内面を表す。又、内面を表す人物は、必ず其人の外見を表す。又、外見を表す人物は、必ず其人の心の動かし方を表す。又、心の動かし方を表す人物は、必ず其人の物語の筋を成す。

主あるまじき、この人物の心の動かし方、外見、内面、物語の筋を成す人物は、必ず其人の心の動かし方を表す。又、心の動かし方を表す人物は、必ず其人の外見を表す。又、外見を表す人物は、必ず其人の内面を表す。又、内面を表す人物は、必ず其人の外見を表す。又、外見を表す人物は、必ず其人の心の動かし方を表す。又、心の動かし方を表す人物は、必ず其人の物語の筋を成す。

事あるまい。この人物の心の動かし方、外見、内面、物語の筋を成す人物は、必ず其人の心の動かし方を表す。又、心の動かし方を表す人物は、必ず其人の外見を表す。又、外見を表す人物は、必ず其人の内面を表す。又、内面を表す人物は、必ず其人の外見を表す。又、外見を表す人物は、必ず其人の心の動かし方を表す。又、心の動かし方を表す人物は、必ず其人の物語の筋を成す。

○美

ろかくらあさき。うがうへるまき。虚室に  
く物をつら。我らうがよきの、ほんせまへにま  
りうかがわしとひすめ。おれゆかあんし。心に  
めああああ。胸のうみに、そこぼくのこと  
ハ、ベキタニハシキ。

丹波より出雲とす所あか。大社をうつて、やで  
たくつうしり。出雲のふゆが一とくや、出雲の西ま  
れば、秋のうえ、蟹海上へ、いはまか、人あらひとぞ  
ひて、つど、出雲とすみゆが、いはまか、あま  
せんと、ハーメトアラヒルノ、若をうみて、ゆ、

「く信あうだか。都前ある。獅子、いまいぬ、さじ  
きて、うーろどまじ、だらかうれば、上人、いみド  
く感じて、あむきでたらや。け御みの、たちや、いと  
めづく。ふうき故あくと、渡ぐみて、うよ殿  
ば、殊勝の事、まらんじよ。うじや。喜トあり  
といへば、だの、あや、みて、まこと、他よこと  
あり。都の、うじかくさんなどりすに、上人、ねゆ  
かーうかて、おとくかく、物事ぬじきかく。た  
つ神官をよびて、此佛社の、獅子のたてられや。う  
空きて、うひあるてよ。寺さし。ちと、

といふれども、事は、うなづかへば  
どうも仕方の奇恵あることやうで、  
て、まことに、いよこれば、上人の感涙が、  
らしくあつたよ。けど。

ハ、つよめか一年、又よみひて、ほく、佛ハ、いよ  
カのまうひらんとす。又がほく、佛ヨハ、  
のまうひとす。又よく、何とて、佛ヨハ  
なすは、やうしと、ちく、又佛ヨハ、  
ヨウシとこちよ。又問ふ。教へにけるほとけを、  
何が教へらひると、又こちよ。されど、又たまの

佛の、きへはようりて、成りたまひありと、又よ  
其をへば、めいひける、第一の佛ハ、いよる。佛  
をもとづ。早う、写一あやあらわすも  
やあらわん。  
佛の、きへはようりて、成りたまひありと、又よ  
其をへば、めいひける、第一の佛ハ、いよる。佛  
をもとづ。早う、写一あやあらわすも  
やあらわん。

和文教科書二之卷終

和文第壹帙第貳帙

明治十九年四月九日版權免許 第壹帙定價金五十錢

第二帙定價金五十錢

第三帙定價金五十錢

第四帙定價金五十錢

第五帙近刻

同 年 同月出 版

同二十一年十一月十六日訂正印刷再版

編 者

下 田 歌 子

東京四谷區尾張町九番地

發行兼  
印刷者

宮 川 保 全

東京日本橋區通塩町八番地

發行所

中 央 堂



右

同

所